

中学年部提案

中学年部会：栗田辰一郎・岸野 存宏・朝蔭恵美子・齋藤 祐一
沼田 晶弘・内田 雄三・大熊 雅士・大櫃 重剛

1. 研究テーマの変容を受けて

本年度、新たな研究テーマとして「学び続ける共同体」という言葉を掲げた。

昨年度まで、「子どもとともにつくる学校の創造」*1とし、サブタイトルには「子どもが学び続ける原動力」、「自己効力感」というキーワードを挙げて取り組んできた。また、研究の方法としては、本校の教育課程の大本である、教科教育活動領域、生活実践活動領域、総合学習活動領域の3活動領域の内容・方法の検討。さらには、教科学習活動領域の内容としての各教科といった部分に注目して進めてきた。

したがって、今年度は、昨年までの研究内容について子どもの姿をもとに検証を重ね、さらには3活動領域の融合によって「学び続ける共同体」が作られることを子どもの姿として実現することを目指していると考えられる。

では、このテーマの変容を受けて、研究の内容・方法をどのように変わっていけばよいのか、中学年部は以下の視点で考えていくこととした。

前研究テーマのサブタイトルの「子どもが学び続ける原動力を探る」という言葉からは個の学びの姿が連想される。なぜなら、原動力をもつのは一人ひとりの個だからである。

もちろん実際の研究では、「切実感」「自己効力感」など個にかかわるキーワードだけでなく、「安心感を支える学級風土」「問いの共有化」など、集団に着目するようなキーワードも出てきている。

そこで、改めて今回の研究テーマ「学び続ける共同体」について考えると、今回は「個」から「個

と集団とその関係性」へと注目する視点を変えて行くことが求められていると考えた。

2. 中学年部の提案・仮説

では、実際に「学び続ける共同体」について研究を進めていくときに必要なことは何だろうか。

これまで言われてきている「学びの共同体」*2、相互啓発的学習観*3などとの違いを明らかにし「学び続ける共同体」としての構成要素を明らかにすること、「学び続ける共同体」を作り上げていくための手立てを明らかにしていくことが求められる。

そうすると、ここでこれまでの研究や本校の子どもの実態、学習活動や学級経営案などの手立てなどを分析し、仮説を立ててそれを検証していくことが必要になってくる。しかし、こうすれば必ずクラスが学び続ける共同体になるというような仮説はそう簡単に立てられるものではないし、そもそも、そのような目指し方がよいとも思えない。

そこで、まずは、各担任が書いている学級経営案を、それぞれのめざす「学び続ける共同体」づくりのための手立てが書かれているもの、つまり仮説であると考えることにした。

本校の学級経営案には、子どもの実態をとらえ、それをもとに願いを掛けていく、自己表現力・コミュニケーション力・社会的スキル、という3つの視点。授業をより総合的にしていくための関連・統合・総合という考え方。さらには、文字通り具体的に学級づくりを進めて行くための手立てとしての「学級づくりの見通しと手立て」といったことが書かれている。

そして、その仮説に基づいて3学習活動領域の活動を進め、それらをもとに変容してきている子どもの姿を丁寧に見とることで、研究を進めて行きたいと考えた。

3. 研究の方法

研究の方法としては以下の三つの方法をとる。

(1) 学級経営案を吟味し合う

まずは、分科会のメンバーの学級経営案の内容を交流し、①なにを書いているのか、②なぜそのように書いているのか、③具体的にどのような場面で実現しているのか、といったことを吟味しあう。

担任が大事にしている言葉・活動・仕組み、などには、その担任がどのような学級をつくりたいのか、授業を理想としているのか、中学年期に大事にしたいことはないかといったことが表れている。そこで、そうしたことを聴き合い、交流することを通して、共通点を見出していくことで、「学び続ける共同体」作りのための手立てを明らかにしていきたい。

一方で、それぞれの違いについても注目したい。そして、その違いは、そもそも考え方が違うのか、理由が違うのか、手立てが違うのか、そこまでを我々自身が対話していくこともまた「学び続ける共同体」作りのための手立てを明らかにすることにつながるであろう。

(2) 学級経営案と指導案の関連を図る

二つ目は、学級経営案と研究授業の指導案との関連を図ることである。

研究授業等で作成される指導案に、学級経営案に書かれている内容が実際にどれくらい意識されているのだろうか。こうした視点をもつことで授業づくりのための手立てがより明確に意識されていくことになる。

また逆に授業づくりの中で必要だと考えていることから学級経営案を見直すことも行う。このことによって、これまでその教師が、ある特定の教科学習活動領域のなかで大事にしてきたことが、自らの学級づくりにどのような役割を果たしてき

ているか、教師自身が、教科毎、あるいは3活動領域をどのように捉えているかが明らかになっていくと思われる。

さらに、この研究方法を通して、教師自身がこれまでは教科学習活動領域のなかだけで大事にしてきたことが、生活実践活動領域や総合学習活動領域でも行うことでより効果的になることに気づいたり、その教師自身の3領域の位置づけを再認識したりすることもできると考えた。

(3) 日々の子どもの姿を見取り、解釈を交流する

三つ目は、具体的な授業や学級の姿をもとに研究を進めることである。日常から、子どもたちの生活や授業の姿を参観し、教師の果たしている役割、めざす学級の姿とその為の教師の働きかけ、教師の願いと子どもの姿のズレ、一人の子どもとその集団との関係性などについて、丁寧に見取り、解釈を交流する。このことで、学級経営案を書いている教師の学級作りについて検証していくことで、「学び続ける共同体」の構成要素と手立てにせまっていきたい。

4. これまでの部会で見えてきたこと

学級・子どもの姿から見えてきた「学び続ける共同体」づくりのための手立て
～栗田学級の提案を通して*4～

① 学級の学びの蓄積

「この板書をとっておいてね」を言える子ども。ここからは、板書をとっておくことで過去の学習を生かして学びを深めようとする姿を見取ることが出来る。そして、そうした過去の学習のなかでの仲間の発言を大事にする姿は、仲間と学びをつくっていこうとする姿へとつながると考えられる。そのために、板書の写真の配布、掲示などの手立てが有効である。

② 教科学習領域同士のつながり

他教科で出た問いが算数（担任の専門教科）に返ってくること、また逆に算数から出た問いが他教科に広がっていくことを意識して授業を行う。

これは学級経営案に書かれている関連・統合・総合の考え方の具体的な姿のひとつとしてとらえることができる。

③ 個と集団との関係性

友だちは、自分と同じことを考えているという「思いこみ」と「勘違い」から授業をつくる。

自分が当たり前と考えていたことが、そうではないと分かった時、子どもの中には、「どうして、友達は自分と考えがちがうのだろう」という自分事としての疑問が生じる。「何で?」という言葉、相手と自分の違いをあきらかにする言葉としてとらえることで、そうした仲間との関係性を作っていくことが大切である。

④ どんな学級をつくっていくか

トラブルが生まれたときの解決方法の段階として、教師と個の関係を考える。

①個と教師の関係の段階。②個と個とを教師がつなぐ関係の段階。③個と個の関係を教師が見守る段階。

さらには、この関係には4段階目として、教師が見守るなかで「個と個と集団の関係」のなかで問題解決を図るの段階へと進んでいくことも予想される。

このトラブルの解決としての4つの場面は、3活動領域それぞれで育てていく部分と共通する可能性があるのではないか。

5. 今後、提案していきたいこと

本年度の研究をもとに来年度以降、提案していきたいこととして以下の3つがある。

- ・〇〇学級が「学び続ける共同体」になっていくための授業と子どもの姿
- ・〇〇学級が「学び続ける共同体」になっていくための授業を提案するための指導案・学級経営案のあり方
- ・その授業と、他の学習活動領域とのつながりの有効性がわかる授業と子どもの姿

- ・その授業と、他の学習活動領域とのつながりの有効性を提案するための指導案・学級経営案のあり方

これらについては、なにをどのように、という内容・方法については明らかになっていない。だからこそ、提案の段階で、その授業の授業者が、「この教科でそだてたものを・・・」、「この教科ではこの経験を・・・」、「教科・領域を越えて、大事にしていきたいことは・・・」、「どんな教科でも、同じように・・・」といったことを、自分のクラスの姿をもとに提案していくことが大事になってくる。

そして、その検討では、「学び続ける共同体」につながる授業であったか、子ども同士のかかわりの姿は学び続ける共同体になっていたのか、授業者のめざす姿は具現化されたのか、具現化される可能性はあったのか、といったことについて、個々の解釈を語ることが求められていく。

6. 参考文献

- * 1 東京学芸大学附属世田谷小学校 (2010) 「子どもとともにつくる学校の創造—子どもが学び続ける原動力を探る—」 東京学芸大学附属世田谷小学校研究紀要No.42
- * 2 佐伯 胖、佐藤 学、藤田 英典 「シリーズ学びと文化」 東京大学出版会 (1995)
- * 3 東京学芸大学附属世田谷小学校 「今、なぜ『一斉学習』なのか」～相互啓発をめざした「よい授業」の追究～ 東洋館出版社 (1987)
- * 4 栗田辰一郎 (2011) 「分数～分数もたしたりひいたり出来るかな」 東京学芸大学附属世田谷小学校研究紀要No.43 (本紀要)

(文責：岸野存宏)